

雜 報

會 員 動 靜

<p>知床軍醫長海軍軍醫大尉 三宅正一 <small>(九月二十五日)</small></p> <p>免本職補大井軍醫長兼分隊長</p> <p style="text-align: center;">正八位 大河原柳司</p> <p style="text-align: center;">正八位 跡部鉄朗</p> <p>(各通)</p> <p style="text-align: center;">永山太郎</p> <p style="text-align: center;">喜多島健鷹</p> <p>叙從七位 <small>(七月十五日)</small></p> <p>岡山醫科大學助教授 笠井經夫</p> <p>依願免本官 <small>(十月一日)</small></p>	<p>岡山醫科大學助教授 笠井經夫 <small>(九月三十日)</small></p> <p>本俸八級俸下賜</p> <p>從七位 笠井經夫</p> <p>從七位 北山加一郎</p> <p>叙正七位 <small>(八月一日)</small></p> <p>得能孝平</p> <p>願=依リ香川第一次健康保險審査會委員ヲ免ス <small>(十月十一日)</small></p> <p>從五位勳六等 森 滋太郎</p> <p>叙勳五等授瑞寶章 <small>(十月三十日)</small></p>
---	---

- 金子廉次郎君 は今般海外視察員として本月十五日福岡出發歐米視察の途に就かれたり
- 好本節君 豫て歐米各國に出張し居られたる同君は本月二十日無事歸任せられたり
- 笠井經夫君 別項の如く今般岡山醫科大學助教授を辭任せられたたる同君は本月中旬より當市東中山下に於て耳鼻咽喉科専門にて開業せられたり
- 長龜久鷹君 は豫て廣島縣三原町平田内科醫院に勤務し居られしか今般同院を辭し明石市西魚町前田醫院を繼承し診療に従事せられたり
- 山田甫一君 は豫て日本赤十字社長野支部病院諏訪分院に勤務し居られしか今般同院を辭し長野縣諏訪郡平野村平野衛生醫院を繼承開業せられたり
- 植善次郎君 は今般三重縣南牟婁郡阿田和村に移轉開業せられたり

平岡篤君避く 君は大正二年岡山醫學專門學校を卒業し廣島縣沼隈郡田島村に於て開業し居られしか今般病を以て遠逝せられたりと洵に哀悼に堪へず謹みて茲に用意を表す

風呂野澤一君 は大正四年岡山醫學專門學校の卒業にして廣島縣安佐郡安村に於て開業し居られしか今般逝去の通知に接したり洵に哀悼に堪へず謹みて茲に用意を表す

板野泰治君逝く 君は大正五年岡山醫學專門學校を卒業し本縣御津郡白石村に於て開業し居られしか本年二月頃病氣に罹り療養に手を盡されしも其效なく去七月十六日遠逝せられたりと洵に痛惜に堪へず謹みて茲に用意を表す

◎**學位授與** 佐藤眞正君は論文を岡山醫科大學に提出し學位を請求し居られしか本年九月十九日の教授會を通過し今般醫學博士の學位を授與せられたり其主論文及び參考論文は左の如し

主 論 文

動脈壁ノ構造ニ關スル組織學的研究

- 其一. 腹部諸脈壁ノ構造ニ關スル比較研究 (獨文)
- 其二. 大小兩循環系動脈壁ノ構造ニ關スル比較研究 (獨文)
- 其三. 腎臟内小動脈ノ内膜ニ於ケル枕狀或ハ半月狀隆起ニ就テ (獨文)
- 其四. 筋性型動脈ノ外彈性膜ノ構造及ビ中膜トノ結合竝ニ一般動脈壁ニ於ケル彈性組織ノ分布ニ就テ (獨文)
- 其五. 陰莖ノ動脈壁ノ微細構造ト其年齡的變化ニ關スル研究補遺 (獨文)

(昭和二年二月岡山醫學會雜誌第四四五號ニテ發表)

參 考 論 文

人體心冠狀靜脈ノ組織學的構造ト其年齡的變化ニ就テ (獨文)

(大正十五年九月岡山醫學會雜誌第四四〇號ニテ發表)

◎ **佛國、英國の旅 (上)**

關 正 次

九月一日、午前十時半、友人數名とボリキヤル教授とに送られてリヨンのペラーシュ驛を立つ。友人が「庭に咲いたのです」と云つて贈つてくれた花束の紙を除いて車窓に挿したら、向側に坐つてゐた娘さんがにつこり笑つた。

リヨンを立つ數日前までは、モンペリエ、トゥールーズ、ボルドーの諸大學を訪ひ、ナントを経て、パリーに出るつもりであつた。ボリキヤル教授と夕食を攝りながらこのことを話すと、休暇中はそれらの大學に行つても教授は不在で會へない、小使さへもまいから研究室は鎖されて居らうと云はれて當惑した。解剖學を専門とする人なら、どんな人でも會つて話せばこちちで得るところがある。又どんなつまらぬ研究室でも、何か特長があるから、仔細に視れば得るところは多いものである。その會つて話すべき人が居らず、入つて視るべき研究室が鎖されてゐては行く理由がなくなる。ただ風物だけを見るために佛國を一周する元氣が私には無い。リヨンの驛を立つときボリキヤル教授が「佛國一周を止めましたね、パリーの研究室にも一月になるまでは主人は誰もまい、しかしお望みなら紹介狀を書いてあげますが」と云つてくれた。不躰ではあるが私は紹介狀も何も持たず突然尋ねて行くのが常である。

野は綠、人家は極めて稀である。耕田でもなく、牧場でもなく、全く放つてあるとしか思はれぬ土地が多い。佛國本土の人口は四千萬で、これが増加しない。パリーの住民は三百萬だが、パリーに接近した土地住民を合すれば四百五十萬以上である。従つて「佛國のパリー」と云ふかはりに「パリーの佛國」と云ひ得る場合も少くない。パリーに着く一時間ほど前に汽車は河に沿つて走り、美しい家と高い樹とが多く望まれた。それから十五分ほど後に、はじめて自動車と人を見た。リヨンを立ち約七時間も汽車で走る間に人を見な

かつたとはおかしい話であるが、どう考へても止つた驛々のほかは人を見た記憶がない。それから又暫く家は殆ど見えなかつたが、いよいよバリーに入る十五分前から急に家の数が増して来た。

着いた驛に近いホテルに入る。

夜附近を歩いてみたが、商店は閉ちて、道は暗く、自動車だけが勢よく走つてゐた。

九月二日。地下電車で凱旋門に行く。疾走する自動車を避けながら門の下に行くと、地面の穴から焰がもえて、「ここに祖國のために死んだフランスの一兵士が眠る」とあり、それを花環や花束が圍んで居る。これは名の知れぬ無数の戦死兵のうちから一人を擇んでここに納めたもので、「無名兵士の墓」と呼ばれる。あの焰はどうしても「アルコール」の焰にちがひないと思つた。

歩いてブローニュの森に行き、ジャルデアン、ダツクリマタシオンを見た。小牛のやうに大きくて猛獸のやうに悪さうな犬が獅子の兒の檻の隣に入れてあつた。恐ろしい犬の變種である。傍の男が「この犬とあの獅子の兒と争つたらこの犬が勝つ」と云つたが、果してどうだらう。

トロカデロ宮からエツフェル塔、それから廢兵院へと歩いて行く。このあたりは花園や立樹が美しい。廢兵院にはナポレオン一世の墓がある。下におりたところにあるその入口には彼が流された島でなした遺言「屍灰はセイヌ河の畔に、私の愛したフランス國民のまんなかに置いてほしい」と云ふのが刻されてある。

地下電車でオペラまで行つて、地上に出ると、オペラ前の車道には自動車がいっぱい詰つて動かずに止つてゐる。動かぬ自動車は危くないと信じて其間を縫ふやうにして歩き、反対側の歩道に出た。暫く立つて自動車のなりゆきを眺めてゐたら、警官の指揮で順序よく動きはじめた。「シネマはいかがです。美しい女、スペインの美しい女も私は知つてゐます」と話しかけてきた者がある。見れば四十歳あまり、杖を持ち、煙草を吸ひ、温厚らしい。が、この温厚らしいはあてにならぬ。私はだまつて又自動車の方を向くと、こんどは英語で「英語をはなしますか」と云ふ。さう云つたすぐあとから、獨逸語で「獨逸語は」と来る。だまつてばかり居られないから、「今は忙しい用事を持つてゐるからいけない」と答へて、「見なさい、自動車が危険ぢやないですか」と話を轉じやうとすると、「あなたはバリーでは美しい女とシネマとをぜひ知らねばいかぬ。さあ行きませう」と車道を横つて向ふへ渡りかける。いよいよ大變だから、「私の用事はそちらでない、こちらだ」と反対の方角へさつさと逃げた。あの男が云つたシネマはどれも普通のシネマではないやうである。果してどんなシネマか私は知らぬ。オペラの周圍をまはつたのち、オペラ街を歩き、地下電車でホテルに歸つた。

九月三日。美術博物館であるルーヴルに行き、午前十時から午後四時すぎまで、六時間あまり、素食もとらず、休みもせず、かなり急いで見て廻つた。ミロのヴェーヌスを見ると、顔は美しいだけでなく、いまままで私の見た寫眞には現れてゐなかつた温かみがある。その顔の右半と左半とは全く同じではないさうな。もし、その寫眞の右半に右半と同じ形をした左半をつぎ合すか、或は左半に左半と同じ形をした右半をつぎ合してみると、顔は美しくなくなつて平凡化することを見た人がある。一般に頭髮はまんなかでなくて側方で分けるがよく、着物も左右均等でないがよい。顔の一侧に黒子をつくれれば、美しい顔ならこれによつてなほ美しさを増さう。ミレーの「祈り」や「落穂拾ひ」も見、ナポレオンがジョセフィーヌの頭に冠を置くときのさまの大作も見た。極東博物館と呼ばれる部には支那のもの、日本のものも多くあつた。

(未完)